

夏のすさまじい雷雨、冬の容赦ない空つ風。私が住む北関東の農村地帯は、しばしばこのように手強い洗礼を受ける。人々の言葉は荒く、声も大きい。大自然の威力の前では、まだつましいとさえ言えるだろう。

長塚節の小説『土』は、吹きすさぶ西風が物語の扉を押しあけ、一〇〇年前の貧しい農村社会のドラマが開始される。今日、その精緻な表現により、民俗誌、農村生活誌としての評価を高めている作品だが、舞台は同じ北関東である。

ところが『土』の感銘を新たにしていた昨年、私は奇蹟的とも言っべき素晴らしい本に出会うことになった。『一〇〇年前の女の子』。著者の船曳由美さんは令名高い編集者であるが、その人が一〇〇年前に北関東の高松村（栃木県足利市）に生まれた少女の物語を書いた。少女は寺崎テイさん、著者のお母さん。高松は私の隣り村、いわば同じ文化圏である。船曳さんが、にわかにな身近な存在になった。

物語は実に鮮やかであった。実母を知らずに育った少女は、つらい養女時代を持ちながらも健気で、未来を切り開く強い力を持っていた。そして背景となる明治、大正期の農村の年中行事や風俗世相が克明に生き生きと描き出される。私は少女の経

プロフィール
1950年群馬県に生まれる。柳田国男研究をベースに日本の地名やアイヌ、沖縄文化、東毛（群馬東部）地域の民俗研究をおこなう傍ら、文学、美術に幅広く関心をもつ。共著「柳田国男をよむ」など。現在、柳田国男研究会会員。



生き生きした民俗誌

川島 健二

験が、四〇年後の少年の私の経験に親しく通じ合っているのを知り、懐かしい共感を覚えた。

たとえば、少女の家では正月三日は餅を食べない。神様にお供えするの餅ではなくウドン。私の家も同様であった。いわゆる「餅なし正月」である。こうした家例は北関東に限らず広く日本に分布するが、ウドンの他、ソバ、芋の例も多く、畑作物の儀礼食としての重要性を象徴している。船曳さんがお母さんの話を入念に聴き、また文献に丁寧に当たり、小さな民俗事象に目を凝らしていたことに心底驚かされた。奇蹟的に感じられたのは、一少女の物語がそのまま見事な農村生活誌に重なり、民俗世界の豊かさを深々としたりアリティで伝えていたからである。

忘れ難いシーンがある。村の瓦屋が仕事を終え一杯やると、荷車の上で寝てしまう。すると牛が荷車を曳いて家まで連れて帰る。私も同様の農夫を見たことがあった。今では幻のような光景が確かに存在していたのである。船曳さんと船曳さんのお母さんが紡ぎ出した世界は、歴史のざわめきの底にある神と人と自然が身近に響き合っていた世界である。私たちの過去を未来への糧としてたく思った。追記——テイさんは旧臘一〇一歳の天寿を全うされた。

月刊
みんなぱく
2月号目次

- 1 エッセイ 千字文
生き生きした民俗誌 川島 健二
- 2 特集 鬼はソト、鬼はウチ
- 3 鬼と常識 笹原 亮二
- 4 鬼の図像をめぐる 小松 和彦
- 5 鬼のつく苗字 村上 政市
- 6 日本の昔ばなしの鬼 小澤 俊夫
- 7 鬼神の哀しさ 松崎 遼子
- 8 鬼子母神と神義論 杉本 良男
- 9 ルーマニアのなまはげ 新免 光比呂
- 10 研究フォーラム
民博東京講演会
「世界の結婚事情
——セネガル、中国、フランスから考える」
野林 厚志
- 12 みんなぱく Information

- 14 地球ミュージアム紀行
鉱山跡に立ちあらわれた鬼の殿堂
日本の鬼の交流博物館
久保 正敏
- 15 みんなぱく 私の逸品
東北の蓑と前衛のデザイン
アンヌ・ゴツソ
- 16 散策と思索の径
古民家という宇宙
杉村 和彦
- 18 多文化をささえる人びと
大阪の民族学級
——在日の子どもたちとともに歩んだ60年
郭 政義
- 20 歳時世相篇
中国・壮族の春節
塚田 誠之
- 22 フィールドで考える
メロンなかまをさがして
田中 克典
- 24 次号予告・編集後記